文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究（シ01）

目　　的　国内外の諸機関との連携を見据え、当研究所の文化財に関する調査研究の成果・データをより国際的標準に見合うかたちに整え、効果的に共有してゆくための研究を行う。併せて地方公共団体と文化財に関する情報の提供と共有を行うことを視野に入れる。

成　　果　1．調査研究の成果の公開と、研究情報の国際発信

・平成30年度に引き続き、当研究所刊行の論文等を国立情報学研究所が運営する学術機関リポジトリデータベース（IRDB）を通じて公開する作業を進め、『美術研究』、『無形文化遺産研究報告』、『保存科学』の3タイトル115件を令和元年度に新たに追加し、合計13タイトル3,631件の論文・刊行物のフルテキストを搭載・公開した。

・ゲッティ研究所のゲッティ・リサーチポータルに当研究所の刊行物及び明治・大正・昭和初期のカタログ（全文データ）を提供し、搭載件数は1,392件となった。今後も提供データを増やしていくための調整・協議と作業を進めた。

・展覧会カタログ所載記事・論文のデータを「東京文化財研究所美術文献目録」として、世界最大の共同書誌目録データベースであるOCLCのセントラル・インデックスに情報を提供し、令和元年度は2016（平成28）年の文献情報2,948件を追加した。

2．国内外の関連機関との協働研究・協議

・京都府所蔵資料のデジタル化作業を継続的に進め、京都府担当者と公開活用についての協議を行った。

・イギリス・セインズベリー日本藝術研究所と日本美術及び同研究に関する英語文献・記事情報の採録に関する運用面での協議を行い、日本美術に関する講演を行った。

・資料の特性により様々な形態・プラットフォームでオープンアクセス資料を増やしてインターネット上で広く国内外に提供するとともに、成果発表を行った。

セインズベリー日本藝術研究所での講演

パブリックドメイン資料についてのシンポジウムにおける発表

発　表・江村知子：「日本絵画にみる四季の表現」セインズベリー日本藝術研究所　19.11.21

・橘川英規、江村知子、小山田智寛：「東京文化財研究所のパブリックドメイン資料：文化財を知り、守り伝えるための資料蓄積と研究支援」、シンポジウム「デジタル知識基盤におけるパブリックドメイン資料の利用条件をめぐって」　20.1.17

研究組織　○江村知子、橘川英規、安永拓世、米沢玲、二神葉子、小山田智寛、小林公治、塩谷純、小林達朗、小野真由美、城野誠治（以上、文化財情報資料部）、久保田裕道（無形文化遺産部、文化財情報資料部兼務）、早川典子（保存科学研究センター、文化財情報資料部兼務）、西和彦（文化遺産国際協力センター、文化財情報資料部兼務）、永崎研宣（客員研究員）

日本東洋美術史の資料学的研究（シ02）

目　的　近世以前の日本を含む東アジア地域における美術作品を対象として、基礎的な調査研究を行い、研究の基盤となる資料の整備を行う。併せて、これに係る国内外の研究交流を推進する。

成　果　1．美術史研究のためのコンテンツ（年紀資料集成）を作成するため1999（平成11）年以降の展覧会図録から年紀のある作品の資料を順次収集し、データベースソフトウェア FileMakerを使用して入力を行い、新たに500件を追加した。

2．本プロジェクトに係る研究会を外部の研究者を交え、行った。

3．平成30年度に引き続き、仏教美術等の光学的手法による東京国立博物館との共同研究を実施した。同博物館所蔵の平安仏画（准胝観音像、准胝仏母像）につき、可視光のみならず、近赤外線、蛍光、蛍光X線、透過X線などによる多角的光学調査を行った。

4．幕末期の日本製伏彩色螺鈿を対象に、2020（令和2）年1月12日～18日にタイ・バンコク都内のワット・ラーチャプラディット、国立図書館、ワット・ポー等において作品の熟覧調査及び写真撮影を実施した。また、1911（明治44）年にタイに渡り、現地の漆芸分野で技師及び教育者として活躍した三木栄が使用していた、蒔絵道具の道具箱の調査を行った。

ワット・ラーチャプラディット扉部材の調査

論　文・水野裕史：「雪村周継と臨済宗幻住派」『美術研究』428　pp.1-18　19.1

・安永拓世：「伝祇園南海筆「山水図巻」（東京国立博物館蔵）について」『美術研究』428　pp.19-48　19.9

・相澤正彦：「静嘉堂文庫美術館本「春日宮曼荼羅」の画風をめぐって」『美術研究』429　pp.1-18　20.1

・米沢玲：「研究ノート　二幅の不動明王画像―禅林寺本と高貴寺本―」『美術研究』430　pp.27-40　20.3

・山本聡美：「研究資料　「妙法蓮華経変相図」（静嘉堂文庫蔵）にみる南宋時代寧波の信仰と社会」『美術研究』430　pp.49-58　20.3

発　表・津田徹英：「資料紹介　東京文化財研究所架蔵　平子鐸嶺自筆ノート類について―その収載内容とノート類のもつ意義―」　令和元年度第2回文化財情報資料部研究会　19.5.31

・江村知子：「河原の風景―ライプツィヒ民族学博物館所蔵「四条河原遊楽図屏風」について―」美術史学会東支部例会　19.10.6

・小野真由美：「至高の気品―土佐光起撰『本朝画法大伝』の意義、そして意図するもの―」　美術史学会東支部例会　19.11.23

研究組織　○小林達朗、小野真由美、塩谷純、二神葉子、城野誠治、小林公治、江村知子、安永拓世、橘川英規、米沢玲、（以上、文化財情報資料部）、早川泰弘（保存科学研究センター）、津田徹英（客員研究員）

近・現代美術に関する調査研究と資料集成(シ03)

目　　的　近・現代美術を対象として日本における展開を軸としつつ、その方向づけに大きく関わった欧米の動向も視野に入れて分析・考察する。併せて、作家や関係者、及び美術館等の諸機関が所蔵する資料の調査を行い、得られた情報を近・現代美術研究の基礎資料として整備する。

成　　果　○画家森田恒友の書誌を作成、福島県立美術館・埼玉県立近代美術館で開催の「森田恒友展」図録（11月）に掲載した。
○仙台城址の「伊達政宗騎馬像」で知られる彫刻家小室達の作品・資料調査をしばたの郷土館で行い、その成果を部内研究会で口頭発表した（8月26日）。
○彫刻家三木宗策のアトリエ及び資料調査を、郡山市立美術館の中山恵理氏他と行った。
○近代女性画家に関する研究として、栗原玉葉筆「聴鶯図」及び石川丹麗筆「華水汲図」についての作品解説を『紫陽花』創刊号（6月）、2号（12月）に発表した。
○美術評論家鷹見明彦の資料調査を遺族宅で行い、鷹見が撮影した画廊の展示風景写真の整理に着手した。
○平成29年度に行ったカリフォルニア大学ロサンゼルス校東アジア図書館でのヨシダ・ヨシエ旧蔵資料調査に基づき、『美術研究』430号にその報告を掲載した。
○久米美術館との共同研究として、既刊『久米桂一郎日記』中のフランス語部分の和訳を進め、また黒田清輝・久米桂一郎間で交わされた書簡を翻刻、その成果を部内研究会で口頭発表した（12月10日）。

（左）《伊達政宗騎馬像》等身大雛形制作過程画像、（右）等身大雛形完成画像（画像提供：しばたの郷土館）

論　文・橘川英規：「日本戦後美術に関する「アーカイブズ」の整理・活用のあり方―UCLA図書館所蔵ヨシダ・ヨシエ旧蔵資料を例に」『美術研究』430　pp.41-48　20.3

発　表・野城今日子：「彫刻家・小室達　基礎研究」　文化財情報資料部研究会　19.8.26
・塩谷純・伊藤史湖：「黒田清輝・久米桂一郎の書簡を読む」　文化財情報資料部研究会　19.12.10

研究組織　○塩谷純、橘川英規、城野誠治、野城今日子（以上、文化財情報資料部）、山梨絵美子（副所長）、三上豊、丸川雄三、田中淳、齋藤達也、田所泰、田中潤（以上、客員研究員）

美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開（シ04）

目　的　絵画や彫刻、工芸といった美術作品は、その表現のあり方、制作に用いられた技術、そして利用された素材などが複合し一体となって成立したものである。本プロジェクトでは、こうしたそれぞれの構成要素がどのような実態を持ち、またどのように関わりあっているのか、関連する諸分野を広く渉猟しつつ多視点的に分析し、その関係の解明を目指すものである。こうした研究の実施により、美術「作品」に対するより深い理解の醸成が期待されるであろう。

成　果　○螺鈿及び漆器類に関わる調査研究等

・2019（平成31）年4月16日・同（令和元）年7月2日・9月6日、東京国立博物館にて唐代琴、南蛮漆器等の調査、7月11日、文化庁分室にて工芸部門調査官立ち会いで同所蔵蒔絵棚の調査、8月14日、サントリー美術館において南蛮漆器や蒔絵棚の調査、9月5日、大阪府岬町理智院、尼崎市寶樹院にてそれぞれ漆塗厨子の調査、2020（令和2）年1月22-23日に知覧博物館ほか南薩摩地域で保存科学研究センターと琉球漆器の共同調査を行った。

○研究成果公開

・6月22～23日、文化財保存修復学会第41回大会（帝京大学）にて、個人蔵漆器の研究成果を保存科学研究センターと共同で、「琉球漆器 朱漆楼閣山水人物箔絵盆の科学的調査」としてポスター発表。甲賀市水口所在十字形洋剣の研究成果を第25回ICOM（国際博物館会議）京都大会2019 ICFAセッション（共同発表者永井晃子氏、9月3日）、第53回オープンレクチャー（11月1日）、水口町郷土史会（同月9日）にて講演・報告した。またこの成果については各種報道で広く周知された。9月24日開催の第6回文化財情報資料部研究会において小林公治が「南蛮漆器成立の経緯とその年代―キリスト教聖龕を中心とする検討―」を、12月24日の第8回文化財情報資料部研究会にて林佳美氏が「日本中世のガラスを探る」と題し発表し、12月に韓国国立中央博物館が刊行した『保存と復元の世界 螺鈿漆器』に論文を寄稿した。

○研究データの整備と公開

・『美術研究』バックナンバーデータについて検索情報を追加整備し、利用者の検索に対する便宜促進と情報流通を図った。また、155号以前を対象とした検索用キーワードの抽出作業を開始した。東芝国際交流財団からの助成を受け、小山真由美著『南蛮漆器考』（2019年中央公論美術出版刊）の英訳事業を進めた。また、柳沢孝撮影スライドフィルムのDB化作業を継続して実施した。

論　文・小林公治：「東アジア螺鈿史の観点から見た高麗螺鈿の成立」『美術資料』95　pp.43-195　19.6

・神谷嘉美：「南蛮漆器を中心とした平蒔絵技法と材料に関する検討」『美術研究』429　pp.43-64　20.1 ほか一件

報　告・山府木碧、倉島玲央、犬塚将英、早川泰弘、小林公治：「琉球漆器 朱漆楼閣山水人物箔絵盆の科学的調査」文化財保存修復学会第41回大会研究発表要旨集　pp. 166-167　19.6

発　表・山府木碧、倉島玲央、犬塚将英、早川泰弘、小林公治：「琉球漆器 朱漆楼閣山水人物箔絵盆の科学的調査」第41回文化財保存修復学会大会　19.6.22

・KOBAYASHI Koji and NAGAI Akiko：「The Minakuchi Rapier, European Sword produced in Japan」第25回ICOM（国際博物館会議）京都大会2019 ICFAセッション　19.9.3　ほか3件

研究組織　○小林公治、小林達朗、二神葉子、塩谷純、江村知子、小野真由美、安永拓世、橘川英規、小山田智寛、野城今日子（以上、文化財情報資料部）、佐野千絵、早川泰弘（以上、保存科学研究センター）、中野照男、田所泰（以上、客員研究員）

無形文化財の保存・継承に関する調査研究(ム01)

目　　的　我が国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承形態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成を行う。

成　　果　1．無形文化財に関する調査研究

ア）芸能分野：古典芸能（歌舞伎・文楽・三味線音楽ほか）に関する調査研究・日本伝統楽器製作を中心とした文化財保存技術の調査研究

イ）工芸分野：靭皮繊維の製作技術に関する調査（福島県からむし工芸博物館）、及び絹糸製作技術調査（岡谷蚕糸博物館）

2．現状記録を要する無形文化遺産の記録作成

ア）諸芸：講談及び落語（正本芝居噺）の実演記録を作成（一龍斎貞水師8席・神田松鯉師6席・林家正雀師4席）

イ）平家：復元曲の実演記録を作成（菊央雄司氏ほかによる復元曲1曲）

ウ）宮薗節：伝承曲の実演記録を作成（宮薗千碌氏ほかによる古典曲1曲、新曲1曲）

実演記録〈平家〉第三回収録の様子

3．研究調査に基づく成果の公表

第13回東京文化財研究所無形文化遺産部公開学術講座「染色技術を支える草津のわざ　青花紙―花からつくる青色―」（東京文化財研究所、2月6日）

論　文・前原恵美：「邦楽調査掛による常磐津節五線譜化の考察」『無形文化遺産研究報告』14　pp.51-78　20.3

・菊池理予ほか：「文化財の視点からみたトロロアオイ生産技術の現状―茨城県小美玉市の実例を通じて―」『無形文化遺産研究報告』14　pp.79-100　20.3

報　告・前原恵美・橋本かおる：「楽器を中心とした文化財保存技術調査報告3」『無形文化遺産研究報告』14　pp.23-50　20.3

・菊池理予ほか：「都道府県史から見る近世日本染色技術の伝播（中間報告）」『無形文化遺産研究報告』14　pp.101-138　20.3

発　表・前原恵美：武蔵野大学能楽資料センター主催関連講座「芸能を支えるもう一つの技―楽器製作をめぐって」　19.7.25

・前原恵美・橋本かおる ほか：東洋音楽学会東日本支部第113回定例研究会「もう一つの及川コレクション―及川尊雄氏収集紙媒体資料―について」(共立女子大学)　20.2.1

刊行物・「日本の芸能を支える技Ⅴ　調べ緒　山下雄治」　20.2

研究組織　○前原恵美、菊池理予、久保田裕道、石村智、佐野真規（以上、無形文化遺産部）、早川典子（保存科学研究センター）、飯島満（特任研究員）、橋本かおる（客員研究員）

無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究(ム02)

目　的　風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形民俗文化財のうち、近年の変容の著しいものを中心に、その実態を把握するために資料収集と現地調査を行う。また、無形民俗文化財研究協議会を実施し、その成果を報告書にまとめる。さらに、これまで東京文化財研究所で収集・保管している無形民俗文化財についての記録・資料の整理を行う。また選定保存技術については、国により選定された技術及び未選定の技術について情報を収集し、そのなかで重要なものについては現地調査・記録作成を行う。

成　果　1．風俗慣習の調査として正月儀礼等について、民俗芸能の調査としてシシ系芸能や風流系芸能等について、民俗技術の調査として製茶技術、和船の製作技術や箕の製作技術等について、伝承や保護の実態についての現地調査や資料収集を行い、現状把握とともに現地関係者とのネットワークを構築した。

諸鈍シバヤ（鹿児島県）調査

2．災害被災地における民俗芸能、風俗慣習の調査として、福島県浪江町苅宿の神楽、宮城県女川町の獅子舞等に関して調査を行い、資料収集・記録保存を行った。また無形文化遺産総合データベース・アーカイブスの構築とデータ収集を行った。

3．第14回無形民俗文化財研究協議会を「無形文化遺産の新たな活用を求めて」をテーマに東京文化財研究所において開催し、172名の参加を得た。4件の事例報告をもとにコメンテーター2名を含めた総合討議を行った。成果は『第14回無形民俗文化財研究協議会報告書』にまとめた。また日本博参画事業として日本芸術文化振興会及び東京国立博物館とともに「東京シシマイコレクション」と題した獅子舞の公開イベント及びフォーラムを開催した。

4．選定保存技術については、滋賀県指定選定保存技術「曳山金工品修理技術」の調査研究を進め、その成果を『曳山金工品修理技術報告書』にまとめた。

論　文・今石みぎわ：「塩と砂糖―白い結晶への憧憬―」『日本の食文化５　酒と調味料、保存食』吉川弘文館　pp.110-139　19.4

・久保田裕道：「Intangible Cultural Heritage contributing to Japanese Post-disaster Rehabilitation」『Intangible Heritage Studies』4(2) Intangible Heritage Association（韓国）pp.7-17 19.11

刊行物・東京文化財研究所編『第14回無形民俗文化財研究協議会』20.3

・今石みぎわ編『船大工那須清一と長良川の鵜舟をつくる』東京文化財研究所　20.3

・東京文化財研究所編『曳山金工品修理技術報告書』　20.3

研究組織　○久保田裕道、石村智、菊池理予、今石みぎわ（以上、無形文化遺産部）